

企画・編集：大須賀慶悟 大阪医科薬科大学医学部 放射線診断学教室

序 説

本誌の特集に脈管奇形が取り上げられるのは、2014年5月号以来、実に11年ぶりで、この間、遺伝子変異に基づく病態解明とともに薬物療法の開発が進み、従来のIVRや外科手術とともに治療も多様化している。

適切な治療方針には疾患名の標準化や鑑別診断が重要であり、国際的には『ISSVA分類』が標準となり、ICD-11にも反映されている。

国内では厚生労働省の研究班による『血管腫・脈管奇形・血管奇形・リンパ管奇形・リンパ管腫症診療ガイドライン2022』が公開され、国の指定難病・小児慢性特定疾病でも助成対象になるなど疾患の認知度が高まっている。

このような国内外の動向を受けて、本特集のテーマは、「脈管奇形の画像診断とIVRのアップデート」とした。『ISSVA分類』では脈管性腫瘍(vascular tumor)と脈管奇形(vascular malformation)を包括して脈管異常(vascular anomaly)としているが、今回は誌面に限りもあり、脈管奇形を中心に経験豊富な施設の先生方に執筆をお願いした。

特集の構成は、総論として『ISSVA分類』に基づく疾患概念や薬物療法の最新動向、そして代表的疾患の病理診断の要点を整理し、各論としてリンパ管奇形、静脈奇形、動静脈奇形や混合型脈管奇形・症候群に関する画像診断の特徴や鑑別診断、さらにIVRの実際について詳しく解説いただいた。ご多忙にもかかわらずご協力いただいた執筆者の先生方に深謝を申し上げたい。

放射線科医にとって日常接する機会は少ない疾患だが、いざ遭遇した際には本特集が手引きとなり、脈管奇形の診断や治療に関する知識の整理に役立てば幸いである。

大須賀慶悟